

キャラクター名 プレイヤー名

飛水 (ヒスイ)

メインクラス	ナイト	Lv.1:	ウォーリア	レベル	14
サポートクラス	ヒーラー	Lv.1:	グラディエーター	性別	女
称号クラス				年齢	外見：20代前半
種族	レムレス			境遇	師匠
出自 (効果)	闘士			目標	奪還

	筋力	器用	敏捷	知力	感知	精神	幸運
基本値	8	28	21	9	21	11	3
ボーナス	2	9	7	3	7	3	1
クラス修正	2	2	1	1	0	2	0
他修正			1		1		
能力値	4	11	9	4	8	5	1

HP	154
MP	88
フェイト	5

装備品		射程	命中	攻撃	回避	物防	魔防	行動	移動
右手	ナイフS3&素手	至近	0	17	0	0	0	0	
左手	クリスタルシールドS1		0	0	0	24	24	0	0
頭部									
胴部									
補助	スピードシューズ				1	4		3	3
装身具	薬箱								
能力値			11	0	9	0	5	17	9
スキル				3		45	21		
その他			1		1	5	3	3	57
総計(右)			12	20					
総計(左)			12	3	11	78	53	23	69
総計(両)									m
ダイス数			4 d	2 d	3 d				

	能力値	スキル	その他	合計	ダイス数
トラップ探知	8			8	+ 2 d
トラップ解除	11			11	+ 2 d
危険感知	8			8	+ 2 d
エネミー識別	4			4	+ 2 d
アイテム鑑定	4			4	+ 2 d
魔術判定					+ d
呪歌判定					+ d
錬金術判定					+ d

所持品	
●収納	
ベルトポーチ	ポグシーチ料理
ヒーラーバッグ	
小道具入れ	●道具
バックパック	冒険者セット
ランチボックス	ヒーリングバック
ポーションホルダー	リムブースト・メタル
ウェポンケース	リムブースト・リフレクス
	騎馬鎧
●マウント	戦士の環
船蟲 (名馬)	神馬の鞍

現在重量：	20	所持金：	86295	預金・借金：	
最大重量：	20				

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ラインカーネーション	★	-	パッシヴ	-	自身	-		
効果：	ベスティア：アクイラを取得、幸運-3							
カバーリング	1	2	DR直前	至近	単体	自動成功	防衛中1回	
効果：	カバーを行う。							
カバームーブ	3	4	カバーリング	-	自身	自動成功	シーン3回	
効果：	カバーリングの射程を20mへ							
アイアンクラッド	4	3	DR直後	-	自身	自動成功		
効果：	自身への物理ダメージを-12							
ボルテクスアタック	1	-	効果参照	-	自身	自動成功		
効果：								
シールドスラム	1	-	パッシヴ	-	自身	-	盾装備	
効果：	白兵ダメージ+盾の重量							
	○							
効果：								
アームズマスターリー：格闘	1	-	パッシヴ	-	自身	-	格闘使用	
効果：	命中+1D							
サバイブ	5	-	パッシヴ	-	自身	-	裸	
効果：	防衛+5+SL*2 魔防+SL							
アンブライカブルボディ	1	-	パッシヴ	-	自身	-	裸	
効果：	物魔防+CL							
テクニカルガード	1	-	パッシヴ	-	自身	-	裸、盾装備	
効果：	盾物防+CL							
	○							
効果：								
スケイルスキン	1	-	パッシヴ	-	自身	-		
効果：	防衛+CL+2 魔防+2							
ベスティア：アクイラ	1	-	パッシヴ	-	自身	-		
効果：	素手の攻撃力CL+3、《飛行能力》獲得							
	1							
効果：								

スキル部分計算：
 攻撃→盾の重量 (シールドスラム)
 物防→15(サバイブ)+CL+2(スケイルスキン)+CL (アンブレイカブルボディ) =CL*2+17
 魔防→CL(アンブレイカブルボディ)+2(スケイルスキン)+5(サバイブ)=CL+7

盾の物防・魔防にはテクニカルガードとハイパーシールドを加算

初めは、肩甲骨。心臓ごと貫かれていたそこを覆った船蟲の外皮は、私に人のソレの代わりに硬い皮膜の翼を与えた。私が蟲憑きになった日だった。次は手だ。戦場で片手が吹き飛んだ翌日、獣とも鳥ともつかぬ、異形の鉤爪と外皮に覆われた手がそこにあった。目、歯、見える所の欠損を蟲が補い、少しずつ私であった場所は失せて行く。幾度も傷ついた内臓がどうなっているのか、最早私には想像もつかない。同じ蟲憑きですら、私の様相を恐れて距離を置いた。彼らの身体はこのように変化していなかった。故に、私に近付き、自らの蟲も"そう"になってしまう事を恐れたのだ。

唯一、助肋骨の野郎だけは変わらなかった。「便利そうだ」と笑い、そして同じ顔で私の腹を焼いた。私は奴の喉笛を噛み千切った。何度、お互いの臍腑を喰らい合ったか分からない。ただ戦場で相まみえる度私達はそうして、私の身体はまた酷く変わって行った。——思い返しても腹が立つ。あの憎たらしい首を撥ねたまま土に埋めてしまえるならどれだけ溜飲が下がるやら。

奴が姿を見せなくなってどれだけ経つだろう。戦場から離れてからこっち、月日の経ちかたの感覚が胡乱で曖昧だ。酒は美味しい。飯もそうだ。特に月でも見ながら口に運ぶのは格別だ。ただ、楽しみがそれだけという暮らしも退屈ではあった。日を数える気力も失せる程。……ヒリ付く戦場の熱気の幻影が、夢の中で私を感ずる。いい加減、ソレに追い立てられるのも飽きて来た頃の、話だった。

蟲憑きを殺す太刀。そんなモノの噂に、何故こうも衝き動かされているのだろうか？何故私の足は久方ぶりの街の路を踏みしめているのだろうか？この退屈な人生を終わらせてくれと誰かに頼むためだろうか。

